
誰かの家

伊川なつ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰かの家

【Nコード】

N5139Z

【作者名】

伊川なつ

【あらすじ】

フリーターの女の子に家族ができるまでのお話

日常その1

「犬を拾った」

通話先の相手にそう伝えると、いきなり気まずい雰囲気になった。相手はまだなにも返事をしていないし、顔も見えない。けれど、あの相手が不機嫌になったな、と感じた。

「犬って野良犬？大丈夫なんでしょうね。病気とか」

不機嫌だと思ったがそうではなく、心配をかけたようだ。私はその予想外に少し戸惑いつつ

「大丈夫だよ。拾ったっていうかむしろ預かってるっていうか。そう、友達の。病気とかも、全然大丈夫」

そんな嘘をつらつらと続けた。

そうすると安心したのか、相手から発されていた窮屈な雰囲気がふつと緩む。私は今のうちにとやや早口でいつも通り別れの口上を言った。

「近況はそんな感じ。じゃあまた来週。…うん、分かってるよ、お母さん」

電話をきって、長くため息を吐いた。大したことをしたわけではなく五分程度会話しただけなのに、全身にだるさを感じていた。しかしバイトの休憩時間はあと少し。怠惰な気分を振り払わなければ、私は自分の頬をぺしっと叩いた。

お疲れ様でしたと挨拶をして、バイト先を離れる。丑三つ時だから真っ暗だ。女性としては少しばかり恐怖を感じる。コンクリートがためためるい熱を持つ空気で深呼吸。かすかな恐怖とバイト終わりの疲れは消えないが、しないよりはマシだ。早足で家を目指す。犬は寝ているだろうか、と失礼なことをふと思う。なぜだか頬が緩んで足取りがかるくなっていた。

結論を言うと犬は寝ていなかった。いや、正しくは犬ではないのだが。

「遅かったね。迎えにいけばよかった」

リビングでジュースを飲みつつテレビを見ていた鈴木さんは、そんな言葉で私を迎えてくれた。眉をきゅつと顰めていて、けれど怒っているわけではなくて…ああ今日はよく人から心配される日だなと思った。

「まだ起きてたんだ」

「うん。待ってた」

待ってた、という言葉に私は少し動揺する。待ってた、なんて友達みたい。そう思っただけで変な感じがして不思議。

「そんな気使わなくていいよ。夜遅いし。ごめんね」

「ううん。DVD見てたのもあるから気にしないで」

テレビを見るとえらくセクシーな女性が何かから逃げている。洋画のホラーかサスペンス。苦手なジャンルであり、途中から映画を観る気などおきない。そして、鈴木さんとは真夜中に一緒に仲良くテレビを見る間柄でもない。私はアクビをしつつ「おやすみなさい」とドアに手をかけた。

「中川さん、帰ってきたときの挨拶」

そう言われ、なんのことも分からずばかんとしたが、すぐに思いついた。

「あ、うん、ごめん。ただいま」

言い忘れていた恥ずかしさか久しぶりに言う恥ずかしさか、顔が少し火照る。うん、という鈴木さんの短い返事を聞いてから、自室に行ってパジャマに着替えた。疲れていたけど気持ちよく眠れそうなのがした。

しんとした静かな空気と冷たいシーツ。

階下からの微かなテレビの音と人の気配が、じんわりと心に染み入る。ああ、明日起きたら何をしようか。そう思えたことに安心した。

日常その1（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。
ゆっくりゆったり進めて行きたいと思いますが
良ければまたよろしく願います。

非日常その1

鈴木さんと出会ったのは二週間前。いつものファミレスのバイトが終わった後の帰り道だった。夕方、濁った空がぐずついていたため近道に公園を突っ切っていて、そこで話しかけられたのがはじまりだ。

がらんとした寂しい公園に、赤く街灯の光をてらりと反射する中型バイクはひどく不釣り合いで、つい視線を向ける。バイクの傍らに座っていた鈴木さん（この時はまだ名前は知らなかったが）とばかりと目が合ったのだ。

「あのすみません、こちらで泊まれるところありませんか？ビジネスホテルとか、ネカフェでもいいです」

そんなことを聞かれたものだから、私はつい鈴木さんの姿をじろじろと見てしまった。家出かと思いもしたが、二十歳は越えているような様子であった。ホームレスというような雰囲気も感じられない。男物のファッションが全く違和感なく、しかし不思議と品が感じられる。

「こちら辺にはホテルもネカフェもありませんよ。駅の方に行けばあるかもしれません」

そう教えると、鈴木さんは分かりやすく困った、という顔をした。宿無しなのだろう。若い女性がどうしてそんな状況にと気になるが、流石に通りすがりの他人が口を出すわけにはいかない。しかし私はその場から立ち去るタイミングが掴めず、眉をよせてなにか思案している鈴木さんのそばにほんの少しの間立ち止まっていた。

今思えばここで立ち止まったことが縁なのだろう。

すぐに空が泣き始めた。傘を持っていないため急いでいたのにと気分が滅入る。洗濯物は干してなかったかいまいち思い出せなかった。今日は洗濯機を回さなかったが、怠惰に先日から干しっぱなしという場合もある。私はここから離れようと「じゃあ、帰りますので」

と声をかけた。

「家は遠い？」

会話が始まると思わなかったので戸惑う。

「なぜ？」

名前も知らない人に聞かれる内容ではないと思い、無意識に声が尖った。

「や、雨強くなりそうだから」

尖りを察したのだろう。焦って早口にまくしたてた。「傘貸そうか
と思つて。折りたたみだけど。あ、でも一つしか…」

見るからに慌ててるのが分かつてついぶつと吹き出してしまった。
宿無しの状況で雨が降ってきているのに、まさか通りすがりに傘を
貸すなんて。そこで、私は何も知らない人間にもかかわらず気を許
してしまった。

宿無しの女性。「雨足は少しずつ増しており、夜も近づき辺りは暗く
なっていく。私の家はここから近く、スペースも広い。」

「雨宿りしていきますか？」

鈴木さんは何を言われたか分からない、というようにぼかんとして
いた。

非日常その2

道中で小走りながらも名前だけは自己紹介しあった。鈴木さんのバイクは取り敢えず玄関横の雨が当たらない場所に停めてもらう。

家に通して、タオルを渡した。鈴木さんも私も思ったほど濡れていない。しかし夏とはいえ生乾きは不快だろうとシャワーを勧めた。

鈴木さんはひどく遠慮して首を縦には振らなかった。

「気にしないでいいですから。風邪でもひいたら大変です」

「いや、本当に、少しの間居させてもらうだけで十分です」

そんな問答をしていると、ふと鈴木さんは家の中を見わたし、不安そうに、ばつの悪そうな顔をした。

「家の人は？ほらご家族の人が帰ってくる前に出ていかなきゃまずいでしょ？」

「あ、気にしないでいいです。いませんから」

鈴木さんは「え」と間の抜けた声を出した。

「なんで？仕事？」

「えー、まあそうですね。親は結構遅くにしか帰ってきません。だから遠慮なくどうぞ」

そう言うものの、鈴木さんは居づらいのか顔をしかめている。このままでは埒があかないし、正直めんどくさい。

「じゃあタオルはその引き出しに入ってますから。シャンプーとかも気にせず使ってください。ドライヤーはここです」

そう畳み掛けて「ごゆっくり！」と脱衣所の扉を閉めた。

強引すぎただろうか、失礼だっただろうかとも思ったが、別にいいかとすぐに気を取り直した。無理して仲良くしなければならぬ相手でもない。雨宿りに家に寄っただけの、一時限りの関係である。けれど久しぶりの来客だ。シャワー後に出すのはお茶にしようか、それともスープでも温めるか。私は迷いながらお湯を沸かす準備を始めた。

非日常その3

その日鈴木さんは簡単な夜食を食べた後、私が食器を洗っている間に寝てしまった。居間のソファ―に寄りかかって小さくイビキをかいている姿に「無用心だな」と呆れた。ソファ―に横たわらせようかとも思ったが、鈴木さんは女性にしては大柄であるし、そもそもあまり知りもしない相手に直接触れるのは抵抗がある。タオルケットを掛けるだけにとどめて置いた。

自分で連れ込んだ相手ではあるが、万が一のためにと、通帳や印鑑などの貴重品や書類、鍵等を持って二階に上がる。自室の引き出しの奥に隠してから、布団に潜り込んだ。

鈴木さん、朝起きたらまた焦って顔をしかめるのだろう。そう思うと少し面白かった。

夏の夜は湿度が高く、快適には程遠い。しかし暑いはずなのに、どこかひやりと冷たい1人の夜に私はほっと安らぐ。

階下に人がいるけれど、それで何かが起きるわけでもない。いつもどおりの夜だあと、私はゆっくりまぶたをおとした。

それが二週間前の出来事。

そして今日で鈴木さんが私の家に居候してから二週間と一日目がたつ。

日常その2

朝起きたところ、ケータイの時計は11時をさしていた。昨日は深夜までのバイトだったがそれにしても寝過ぎた、と自分に呆れつつ布団から身体を引きずるように出る。動かした体がぱきっと嫌な音を立てた。いまいち体も気分も調子が乗らない。

とりあえず何か口にしよう、下に降りるため簡単な部屋着に着替える。胸元まで伸びた黒髪も櫛を通してゴムでまとめた。さすがにパジャマにぼさぼさ頭、といった体を他人に見られるのは抵抗がある。ノーメイクなのは、まあいいか…と諦めているが。

パンか何かを食べて、シャワーを浴びよう、今日はバイトは入れてなかったはずだ。そう考えながら一階に降りると、廊下で鈴木さんと出くわした。

「あ、おはよ」

「おはよう。出るんですか？」

「うん、バイト。いつてくる」

鈴木さんは私よりも遅くまで起きていたのに、もうすでに完璧に出かける準備を済ませていた。なんだかだらしのない自分が少しだけ恥ずかしく感じる。

ふわふわした癖っ毛のある茶髪はすこし襟足が伸びすぎたショートだが、首のところで縛られていて暑苦しさは感じられない。いつもの男物の服がいつも通り似合っていた。

「いつてらっしゃい」

鈴木さんを見送ってからキッチンへ向かう。ふわりといい匂いがしてテーブルを見ると、私の分のサラダと目玉焼き、ソーセージが用意されていた。

日常その3

洗濯と掃除を終えて時計を見るともう夕方になっていた。起床が遅かったので仕方が無いが、それにしても寂しい休日だ。とはいってもだいたい休日に予定が入っていることなど滅多にないが。

鈴木さんは何時までバイトなのだろうか。朝食を用意してもらったので、お返しに夕食をと思い、冷蔵庫を開く。冷蔵庫の中はがらんとしているが今日の夜と明日の朝までの食料はなんとかある。買い出しの必要はなし。

夕飯の準備にはまだ早い時間。かといって今から出かける時間としては足りない。やる事がなくなつて、さあどうしようとぼんやりお茶を飲んでいると、ケータイのランプがちかちか光った。

今、家に行ってもいい？

絵文字もなにもない文面。高校のクラスメイトからだった。すぐさま了承の意を返信する。

すると一分も待たずにインターホンが鳴った。いくらなんでも早すぎる、と呆れつつ玄関に向かう。

一応、魚眼レンズで確認してから扉を開けた。

「ごめんねー。急に」

「いや、いいけど、早くない？」

「着いてからメールしたからねえ」

ごめん、ごめんと言っているが、謝っている様子が微塵も感じられない。人好きのする笑顔の友人、奈々恵は、学校から直接きたのだろう。夏物にしてはごわりとした生地の手ぬぐいを来ていて、重そうなデザインセンスのないスクールバックを肩に掛けた格好だった。校則を守った短めの前髪が似合う女の子だ。

「家に遊びに来るの、久しぶり」

リビングに入った奈々恵は「相変わらず広いねえ」と呟いた。

「今日どうしたの？バイト入ってなかったから良かったけど」

聞くと、奈々恵はぱつと顔を上げた。輝いた瞳がまんまるで相変わらず、美人。私はそんな感想をぼんやりと抱く。しかし、そんなぼんやりとした思考は即座に、ふっくらした唇の発した言葉に蹴散らされた。

「犬を見にきたの！まだいる？」

「……………え？」

日常その4

「犬ってなに？なんの話？」

突拍子のない奈々恵の言葉に、なんのことだとぼかんと口を開けてしまった。すると奈々恵は奈々恵で首を傾げる。多分いま私たちは同じような顔をしている。

「犬預かってるんじゃないの？おばさんから聞いたんだけど」

そう言われてあつと声を上げた。確かに私は昨日、母との通話で犬がいるというデタラメを言った。私の母と奈々恵の母は昔からの友人で今も仲が良い。クラスの中でタイプが違うと言われていて、クラス内での女子グループも別々な私たちがこうして一緒に過ごす機会があるのは、その繋がりからである。

「あーごめん、それ嘘。内緒にしといて」

奈々恵がええっと不満げな声をあげた。

「いないの？見たかったのに……」

唇をとがらせ、なんでそんな嘘吐いたのと非難の目を向けてくる。困ったなあと目を逸らしたが、すぐ観念して本当のことを白状した。奈々恵は頑固で拗ねたら面倒なタイプだし、犬うんぬんが嘘だと母に伝わるなんてことは避けたい。

「犬じゃなくて、人間の居候がいる」

「は？」

眉をしかめて、もう一度はあ？と奈々恵は繰り返した。

「え、なに？どういうこと？親に内緒でって……あ！」

突然はつとして、次はにやりとだらしなく口元が緩んだ。くるくると表情が変わるのは奈々恵の魅力の一つだが、今の表情はちよつと似合っていない。

「そつかそつか。彼氏か！同棲か！」

「違うわ！」

ばっさり言い捨てる。しかしそこで引き下がる奈々恵ではない。

「まあまあ、照れない。そこ座って。詳しく話してよ」
「ちがうつつーに」と呟く。奈々恵に話したのは早計だったか。
だがもう遅い。こうなったら鈴木さんのことが母にばれないよう協力してもらおう。そう前向きに頭を切り替えた。
久しぶりに同世代の女の子との会話に、私は少しだけ浮かれていたのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5139z/>

誰かの家

2012年1月14日17時53分発行